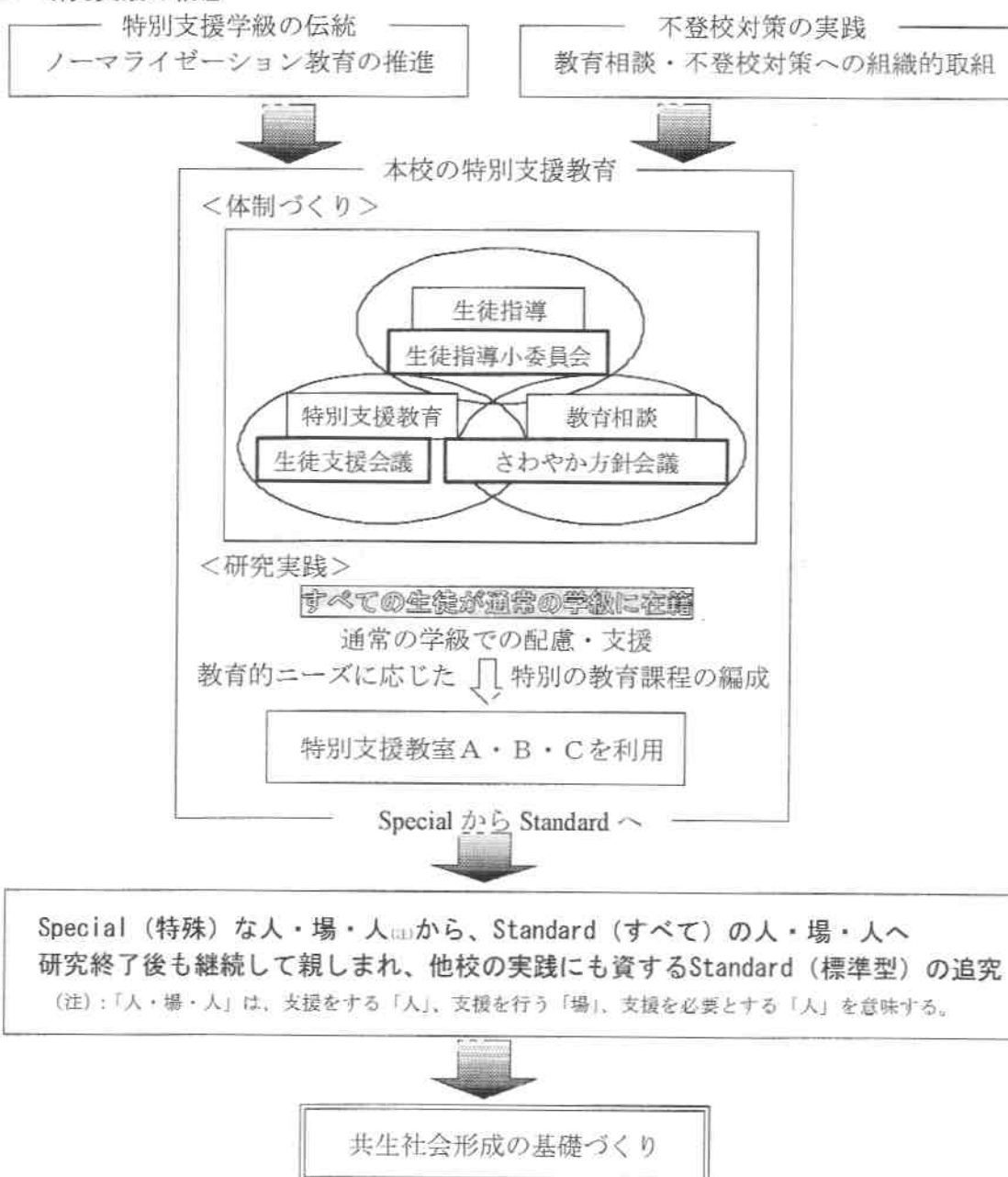


文部科学省指定研究開発学校（特別支援教育）  
**三年次最終報告会**  
 埼玉県熊谷市立富士見中学校

1 研究開発課題

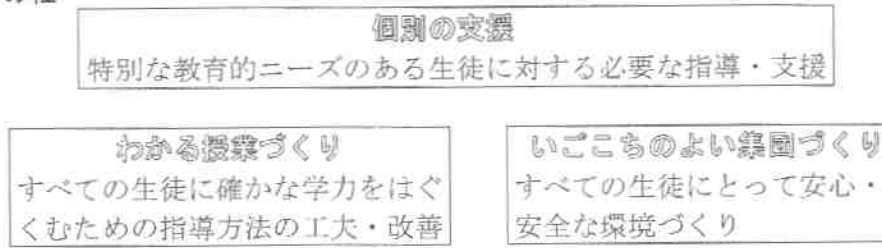
発達障害を含む障害のある生徒や学校生活に不応を示す生徒一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程の編成及び指導の在り方に関する実践的な研究開発

2 研究実践の構想



3 研究実践の視点 - 「3つの柱」と「3段階の援助」 -

(1) 3つの柱



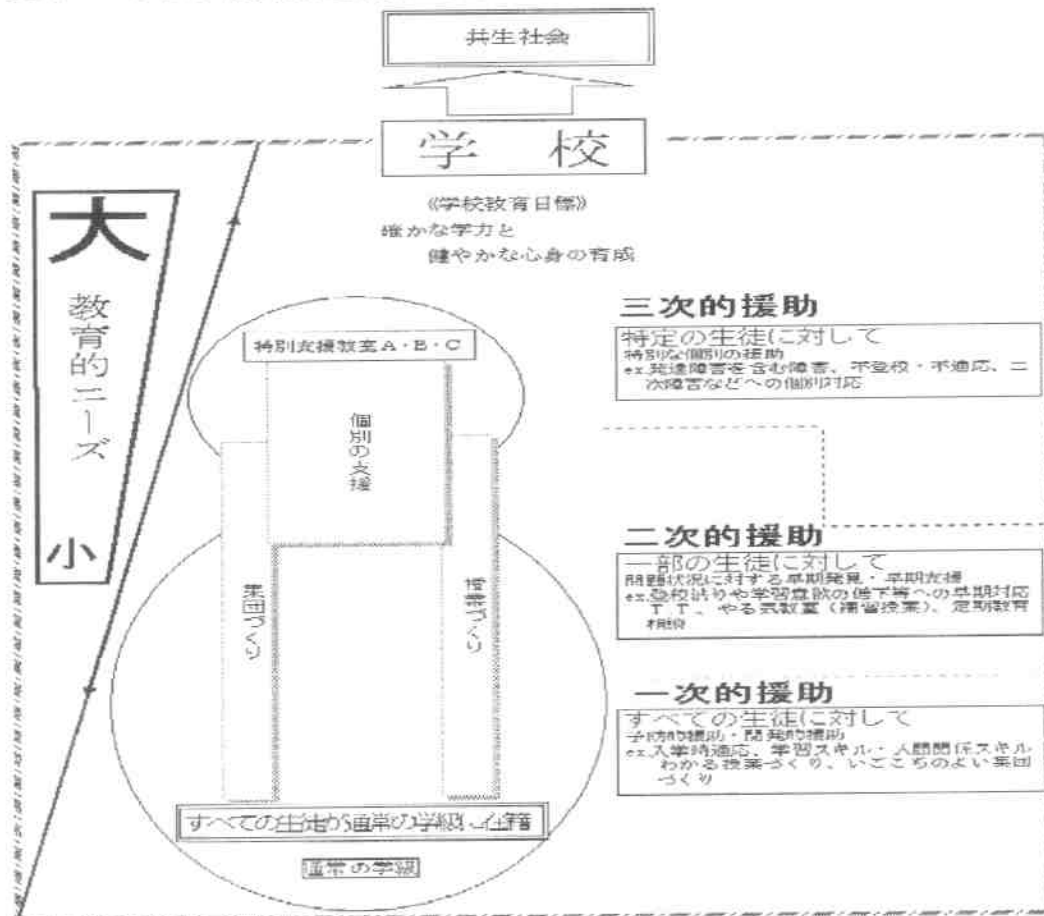
(2) 3段階の援助

**一次的支援**  
すべての生徒を対象に、「いごちのよい集団づくり」と「わかる授業づくり」

**二次的支援**  
一部の生徒を対象に、問題状況の早期発見・早期支援

**三次的支援**  
①発達障害を含む障害のある生徒及びそう思われる生徒を対象に、それぞれの教育的ニーズに適する指導・支援  
②不登校や集団への不適応を起こした生徒を対象に、その改善のための指導・支援

図表1 本校の特別支援教育における3つの柱と3段階の援助



#### 4 研究実践

##### (1) わかる授業づくり

多様な教育的ニーズを持つ生徒が在籍する通常の学級の授業で、特別支援教育の視点から支援や指導法を工夫し、個別の配慮を明確にした授業づくりを行う。

すべての生徒が授業に参加し、わかったと実感できる授業づくり

###### 授業で

- ・授業の流れを板書（授業の見通し）
- ・重要部分の示し方を全教科で統一
- ・記述式の自己評価カードの利用
- ・学習規律の徹底

###### 指導案の工夫

- ・学習内容の明確化
- ・配慮を要する生徒に対する支援の具体化（目標、手立て、評価）

###### 教材の工夫

- ・個別支援対象者向けの教材の工夫
- ・一斉授業向けの教材の工夫
- ・ノートづくり

###### 支援マニュアル

- ・生徒の特性を把握し、それに対応した指導の工夫点をマニュアル化

###### 成果と課題

生徒アンケートより

- 「授業がわかりますか」に対して9割程度の生徒が「わかる」と回答
- 「後で役立つノートを取っているか」に対して9割の生徒が「取っている」と回答
- 「板書がわかりやすい」「授業の流れを書いてくれる」「大切なところをわかりやすく示す」の質問に対して、「あてはまる」と回答した生徒が8割から9割  
→教師の指導力が向上
- どのアンケート項目にも1割から2割程度の生徒が「わからない」と否定的に回答  
→今後もさらにこうした生徒への支援を充実する必要

##### (2) いごちのよい集団づくり

様々な特性を持った生徒が共に生き生きと暮らし一人一人が自己実現できるよう、集団の安心・安全を確保し、集団内の円滑な人間関係を形成する集団づくりを行う。

自分も友達も大切にされる集団づくり

###### Q-Uの活用

- ・集団の把握と改善の手立て

###### コミュニケーショントレーニング

- ・ソーシャルスキルトレーニング

###### ルールとリレーション

- ・学級活動
- ・生徒会活動
- ・部活動

###### 成果と課題

- Q-Uの活用により、学級や各個人の状態を把握し、課題を改善できた。
- コミュニケーショントレーニングやルールとリレーションづくりにより、生徒の間に仲間意識が生まれ、集団活動が活発化するとともに、学級内の対人関係のトラブルが減少した。

- 指導する教師が研修を積み、コミュニケーショントレーニングについての指導スキルを高めていく必要がある。

### (3) 個別の支援

発達障害を含む障害のある生徒や学校生活に不応を示す生徒に対し、一人一人の教育的ニーズに応じた教育課程を編成し、多様な障害や特性、実態に基づいた教育的ニーズに対応できる指導・支援を行う。

すべての生徒が通常の学級に在籍 教育的ニーズに応じて個別の支援  
個別の支援のための校内体制整備&特別支援教室A・B・C



事例の分類 (教育課程の特徴から分類) 支援のタイプ	支援率*
・タイプⅠ ほとんどの授業を特別支援教室 a 特別支援教室Aを活用 b 特別支援教室A・B・Cを活用	80 ~ 100 %
・タイプⅡ 相当程度の授業を特別支援教室	50 ~ 79 %
・タイプⅢ 一部の授業を特別支援教室	1 ~ 49 %
・タイプⅣ 通常の学級で配慮、支援 a 入り込みでの個別支援 b 教科担任の配慮	0 %

\*支援率=特別支援教室の授業時数/週の総授業時数×100(%)

事例の分類 (支援の実際から分類)

- ・①型から⑭型まで→生徒の特性に応じた支援の実際から分類
- ・X年からX+1年への変化  
「適切な支援により、生徒が成長し翌年の教育課程を見直した結果、支援率が低下した事例」  
「X年の支援に課題があり、より生徒の特性に適した教育課程に見直した事例」  
など

成績評価について

- ・特別支援教室での評価は、文章による個人内評価。通常の学級での評価は、数値による絶対評価と必要に応じて文章による個人内評価
- ・成績評価をめぐる課題 (特に進路指導の観点から)  
①高校進学には、特別支援教室における学力補充・教科の補充の支援と通常の学

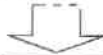
- 級における「わかる授業づくり」の取組が重要となる。
- ②中学校での本人の努力を評価してもらえるような情報提供の在り方を中高連携の視点から工夫する必要がある。

## 特別支援教室の支援の実際

### 特別支援教室 A

- ・生活の自立、社会で生きる力や働く力を身に付けるための教育課程
- ・従来の特別支援学級の機能を活用し、その伝統とよさを継承
- ・小集団の学習形態
- ・日常生活学習、生活単元学習、自立活動、作業学習、日常生活に関わりの深い教科等の学習、総合的な学習の時間、進路学習等
- ・小集団でのきめ細かな個に応じた指導と支援
- ・同質集団の持つ安心感と自己有能感の向上を通じた情緒の安定

特別支援学級から特別支援教室 A への移行  
 <特別支援学級のよさを生かす>



グループ指導  
 集団指導  
 クラス別指導

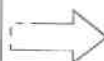
登校	特別支援教室 A
見通しの会	特別支援教室 A
朝の会	通常の学級
1～4校時	個別の指導計画による
給食	通常の学級
5～6校時	個別の指導計画による
帰りの会	特別支援教室 A
放課後	部活動

### 特別支援教室 B

- ・一斉授業への復帰をめざした教育課程
- ・通級指導教室の機能を活用
- ・個別の学習形態（一部小集団の学習形態）
- ・自立活動と教科の補充
- ・一斉授業復帰へのカタパルト\*として、自己理解と自信回復 一斉授業への復帰では学習面での支援が有効なことから、通常の学級の授業内容を生徒の実態に合わせて工夫した教材による教科の補充

\*ここでは、生徒がスムーズに学び生活できるよう、力を蓄え一斉授業へ押し出す力を指す。

教室レイアウトの工夫  
 個別指導（一部小集団）  
 6つの指導内容



学び方を含めた学習支援（プルアウト）  
 支援員による通常の学級での支援（プッシュイン）

## 特別支援教室 C

- ・通常の学級や特別支援教室 A・B で学ぶ基盤づくりを図る特別の教育課程。
- ・個別の学習形態（一部小集団の学習形態）。
- ・学力補充と自立活動。
- ・個別の学力補充を通じた自尊感情の向上、情緒の安定、社会性の向上。



## 生徒の変容

### 特別支援教室 A を主に利用する生徒

- 事例 1 …従来の特別支援学級のよさを生かした教育課程が有効
- 事例 2 …通常の学級での交友関係、得意分野の伸び、通常の学級で「できる」との自信

### 特別支援教室 B を主に利用する生徒

- 事例 1 …特別支援教室 A・B を併用→すべての時間を通常の学級
- 事例 2 …特別支援教室 A・B を併用→学校行事等への参加



特別支援教室 B を利用する生徒にとって、特別支援教室 A における小集団での支援が有効（自己有能感、情緒の安定）

### 特別支援教室 C を主に利用する生徒

- 事例…個別の支援を通じて、一斉授業への復帰



個別の学力の補充は、情緒的支援となり、通常の学級で学ぶ基盤となる

## 個別の支援 ー成果と課題ー

- 特別支援教室を利用した生徒は、総じてよい方向に変容している。
- 特別支援教室 A と B を併用すると、効果が大きい。
- 「交流及び共同学習」の推進が、従来の特別支援学級と特別支援教室の架け橋となる。
- 特別支援教室 A を多く利用している生徒にとって、通常の学級での授業や生活を通じ、次のような変化があった。
  - ①進んで在籍学級に行けるようになった。
  - ②級友と交流できるようになった。
  - ③通常の学級での授業で、得意分野の力を伸ばすことができた。
- 他方で、特別支援教室 A での指導の継続性という点で課題を残した。
- 特別支援教室 B を利用する生徒にとって、授業の予習や学び方の学習支援（プルアウト）と、支援員が通常の学級に入り行う支援（プッシュイ

ン) が有効である。

- 特別支援教室BやCを利用する生徒にとって、教科の補充や学力の補充は、一斉授業への復帰の鍵となる。これは、進路指導面でも重要。
- 通常の学級で、自然な交流や温かい言葉かけ、援助行動が増えた。

## 5 成果と課題 - 3年間の研究実践から -

### 仮説の検証

仮説1 障害のあるなしに関わらず、個の教育的ニーズに応じた指導・支援が行われれば、生活や学習の困難の改善が期待されるであろう。

- ①すべての生徒が通常の学級に在籍し通常の学級で新たな可能性を見出すことと、特別支援教室でのきめ細かな指導・支援の継続とのバランス
- ②「多様な学び」に対応できる教員の特別支援教育に関する専門性の向上

仮説2 校内支援体制の整備と一次的支援から二次的支援までの連続した支援の実施により、個の課題に応じた適切な指導・支援が行われるであろう。

- ①生徒指導、教育相談、特別支援教育を統括する校内支援委員会の機能の充実
- ②通常の学級での支援や指導の充実

仮説3 個別の支援、いごちのよい集団づくり、わかる授業づくりの3つの柱が推進されれば、共生社会の基礎が形成されるであろう。

- ①各教員の専門性の発揮
- ②校内組織、教員相互の意識的な連携
- ③「一人一人を大切」にした「すべての生徒にすべての教職員で」取り組む実践の継続

仮説4 専門機関、外部機関、地域との連携により、充実した支援が継続して行われるであろう。

- ①中学校と進路先との連携の充実
- ②進路実現を含めた一貫した支援のために、行政との連携

## むすび

- 共生社会の基礎づくりに向けて -

- 「多様な学び」を認め、校内の教職員が連携してチームで支援
- 「みんなが資源、みんなで支援」
- 他校の実践に資するために
  - ・それぞれの学校の伝統と校内資源を生かす
  - ・特別支援学級の伝統と実践を活用
  - ・集団づくり、授業づくりの専門性を生かす



### NEW STANDARD

先生、どうして  
Aさんがここにいるの？



先生、どうして  
今日はAさんがいないの？

# 富士見プラン

New Standard ～新たな標準の創出～

一人一人の教育的ニーズを把握  
課題や身につけさせたいことの明確化  
個の課題に応じた効果的な指導や支援

## 中学校

共生社会形成の基礎

生徒の変容

授業がよくわかる  
学校が楽しい  
学級はいごちがよい  
一斉授業へ参加できる

## 個別の支援

一人一人の教育的ニーズ

個に応じた教育課程  
特別支援教室 A・B・C

教育的ニーズ / 大 / 小

### わかる授業

わかったと実感できる授業  
全教科共通・各教科の工夫  
支援を要する生徒への対応  
教師・生徒の意識変化

発達障害を含む障害のある生徒  
学校生活に不応を示す生徒

生徒

### いごちのよい集団

集団の安心・安全  
ルールとリレーション  
Q-Uの活用  
コミュニケーショントレーニング

## 小学校

個別の指導計画

## 家庭・地域

学校生活・学校での学習の基盤の確立

「熊谷の子どもはこれができるです」

・朝ごはんをしっかりと食べる ・呼ばれたら「はい」と元気よく返事をする  
・「ありがとう」「ごめんなさい」と言う ・友だちをたくさんつくる

高等学校  
特別支援学校

中高連絡会  
個別の移行支援計画